2022年8月1日発行
（毎月1回1日発行）（77巻8号）
ISSN 0035-7774

Digest of Science of Labour

労働の科学

2022 August 8
Vol.77, No.8

夕陽の綾織／山本美智代

特集

コミュニケーション力を高めるために

コミュニケーションスキルアップでより良い職場環境を構築／市川慎次郎
好事例写真シート活用とコミュニケーション／川上 剛
コミュニケーションエラーはなぜ起こる?／井上枝一郎

巻頭言

今，伝えたいこと
細田瑳一

連載

漂流者たち―クミジョの肖像⑰
本田一成

芸能従事者の今⑬
森崎めぐみ

連載

労研アーカイブを読む㊽
椎名和仁

凡夫の安全衛生記㊻
福成雄三

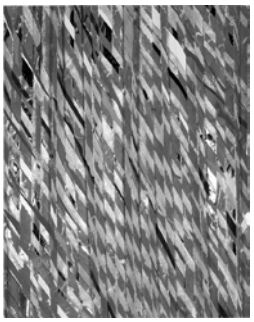
大原記念労働科学研究所

Digest of Science of Labour

労働の科学

2021 August 8
Vol.76, No.8

巻頭言　俯瞰（ふかん）
今，伝えたいこと 1
細田 瑳一［大原記念労働科学研究所 理事］



表紙作品：山本美智代
「夕陽の綾織」
シルクスクリーン＋ドローイング（203×170cm）
表紙デザイン：大西文子

特集　コミュニケーション力を高めるために

コミュニケーションスキルアップでより良い職場環境を構築
..... ［株式会社横引シャッター］市川 慎次郎 4

好事例写真シート活用とコミュニケーション
..... ［労働安全衛生・労働監督シニアスペシャリスト］川上 剛 9

コミュニケーションエラーはなぜ起こる？
..... ［大原記念労働科学研究所］井上枝一郎 14

Graphic

写真でみる労研の歩み (6)
..... 口絵

Series

芸能従事者の今 (13)
令和3年度の安全衛生調査② ..... 森崎 めぐみ 22

ILOインド・南アジア こぼればなし (16)
インド，アーメダバード市のごみ収集・仕分け職場 ..... 川上 剛 28

「＃教師のバトン」で伝わる (15)
教職不足の現状と解決に向けた課題 ..... 藤川 伸治 31

労研アーカイブを読む (78)
GHS絵表示の重要性 ..... 椎名 和仁 34

労研アーカイブを読む (79)
意見調査をもとに企業規模と労使関係について分析 ..... 岸田 孝弥 40

「働き方の未来を50人が読む」第２回調査報告〈速報版〉
「働き方の未来を50人が読む」プロジェクトチーム
..... 浜野 潤（代表）・石井 賢治・北島 洋樹・酒井 一博・佐野 友美
坂本 恒夫・福島 章・松田 文子・余村 朋樹 48

漂流者たち クミジョの肖像 (17)
『クミジョ白書2019』(5) ..... 本田 一成 50

凡夫の安全衛生記 (66)
「さまざまな組織・立場で④」組織などを活かす ..... 福成 雄三 52

Column

BOOKS
『発酵食品の歴史 ビール，パン，ヨーグルトから最新科学まで』
微生物の偉大な力 ..... 椎名 和仁 54

『日本の労働衛生の変遷 いま語り継ぐ，働く人の健康を守る取組み』
労働衛生行政の当事者が語る 昭和・平成・令和の労働衛生政策の歩み ..... 編集部 55

勞働科學のページ 56

次号予定・編集雑記 64

今、伝えたいこと

細田 瑳一

ほそだ さいち
大原記念労働科学研究所 理事

私は医師の多い家系で育ちながら、その頃著しく進歩していた生化学に興味を覚え、昭和25年に京都大学理学部へ入学しました。しかし、周囲の反発もあり2年後には東大医学部に転入、縁あって京都で出会った国立公衆衛生院の鈴木武夫先生から、東大医学部に行くのなら自身もOBである社会医学研究会に入るよう勧められました。昭和27年の五月祭で社会医学研究会の展示を手伝ったことを覚えています。社会医学研究会では農村や林業の調査などを実施。保健師の方と共に、山村のへき地や、東京都内でも自宅で療養して居られる結核患者を訪問しました。農村や林業の過酷な現場に出会う中で、生活と労働、労働衛生、労働と疲労などをキーワードに、社会医学的な見方で労働と健康の関係、特に筋肉・神経の興奮感覚の一時的疲労と全身の疲労の評価方法について考察を深めるようになりました。私自身が結核を患い、大学に通いながら療養する日々を送った経験があったこともあり、また生化学を学んだ人間として、診療に当たっては生理・薬理学的機能の状態を科学的に検査すること、あるいは健全な臓器機能、各種の薬品の影響を評価する方法を模索するように努めました。とりわけ疲労の問題については、科学的な根拠をもって疲労を測定できないかと考え、生化学的な環境の評価を研究されていた鈴木先生に、「疲労」を客観的に見る方法を学びたいと相談したところ、研究の第一人者として労働科学研究所の暉峻義等先生を紹介してくださいました。

昭和28年、世田谷祖師谷の労研に暉峻義等先生をお訪ねしました。一学生の私を温かく迎えてくださり、「疲労を客観的に評価するにはどうすればよいのか教えてください」という私の問いに「君ね、私もいろいろ書いていますが、非常に難しいことです」とおっしゃいました。部分的な疲れ、例えば神経の伝達速度やその認識の変化は客観的に評価することが出来たとしても、心身が疲れているかどうかは個々人の感性で変化し、全身の疲労には神経の疲れもあれば、内臓の不調からくる疲れもあり、それを客観的に評価することは実に難しいということでした。わが国の全般的方針としては義務教育修了年齢で一人前の社会人として就業する事になっているが、欧米の主要な国ではもっと社会的成長を促して成人を認めていると論されました。大変革新的な方であるという印象が強く残っています。

今回、本稿の執筆にあたり、暉峻先生の論文『産業に於ける人的要素に関する研究』（労働科学研究第8巻第2号）を再読しました。論文は「婦人労働に関する生物学的見解」と「産業疲労の研究方法に関する批判的考察」の2本で構成されています。

「婦人労働」では、「何歳から仕事をやらせるか」という考察で、当時の日本政府が9年の義務教育年限を終えれば労働者として使ってもよいという見解を示したのに対し、暉峻先生は「もし、教育の義務年限を基準にするのであれば、おそらく日本はやがて義務教育が18歳くらいまで伸びるであろう」と書いています。また、紡績工場の婦人労働者の休業率を3年にわたって調査する中で、「一般に日本婦人は18歳から19歳に至って初めて強靭なる抵抗力を有する体質に達する」と明言しています。昭和の初めに将来を的確に見抜いた人がいたことに驚かされます。近年の teen brain の発達の考え方などのない時代の話ですが、大原總一郎氏と同じく、100年先の見える方だったと思います。

「産業疲労」の結論は「疲労検査については、いずれの産業に対しても相当の結果を示し得るという方法は得られなかったが、種々の失敗や模索の中に、一つ、二つの光明を認めつつある」と締められています。閉塞感漂う時代の今こそ、暉峻先生の先見性に学ぶべきだと思います。